

---

**里ヒカルがツンデレの妹と、気まぐれでたまーに異世界とか行きつつも、日常系とかもやって**

小林実

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

小説家になろうの平均的能力値の月見里ヒカルがツンデレの妹と、気まぐれでたまーに異世界とか行きつつも、日常系とかもやっていくそんな物語始めました。嘘です

### 【Nコード】

N4591Z

### 【作者名】

小林実

### 【あらすじ】

ちよつとチートな主人公『月見里ヒカル』のらぶえっちあり、ハーレムあり、異世界あり、ミステリーあり、VRMMORPGあり、パンツありの行くとこまで行くストーリー。お気に入り登録のステマやってます。読んだら登録したくなるかも！？

## 1・最初に謝つとく、「ごめんネ」(前書き)

この小説は短気な方、純粹な方、真面目な方はご傾読をおすすめしません。なぜなら、主人公月見里ヒカルはなんでもできてしまうからです。

## 1・最初に謝っとく、「じめんネ」

「月見里、今回のテストも100点だったな」  
先生が言った。

「ありがとうございます」  
当たり前だ。なぜなら俺は天才だから。努力なんかしなくても全  
てできる。だから学校生活っていうのは何だか退屈だった。  
嫌になりながらも、靴箱を開けると無数のラブレターが。

「困るよなあ、勝手に好きになっちゃうから」  
ヒカルはそれを一つ残らずゴミ箱にぶちこむと、友達と一緒に歩  
いた。

「相変わらずお前はすごいな」  
友達が言う。そんな時、異世界への扉が目の前に現れた。5分で  
魔王を倒し、世界に平穏が訪れた。

「勇者様、あまりに早すぎです」  
爺が言う。

当たり前だ。なぜなら俺は完璧だからだ。  
俺は爺に見送られながら、朝の学校に戻る。  
6分後、きゃーという叫び声がして、殺人事件が起こった。  
「あいつが！……あいつがオレの妹を！」

完全犯罪と思われた密室殺人が、犯人の自供までおよそ4分。  
当たり前だ。俺のIQは200だから。なんなら300でも良い。  
400でも構わない。

無事に教室に着くと、そこはハーレム王国だった。  
「お帰りなさいませご主人様」

甘い声とともにメイド服の女子たちが俺を迎え入れた。  
金髪ツインテールのミニス力娘は茶を運び、清楚系ロングヘアの  
委員長は俺に団扇を仰ぐ。

男の娘もいた。そして無条件で全員脱ぐ。パンツも見せる。

残りのクラスメートはドラゴンと戦っていた。副委員長は水属性で、月島は土属性、川西は光属性。総攻撃をしかけているらしいが、どうやら苦戦しているようだ。

現場に行つて、炎属性の俺が一撃で仕留める。ドラゴンがその場でくだばる。また姫を娶った。

4分後、ラブコメになった。全員寝取った。

かつては魔法学校にも行つたが、当然俺に並ぶものではなく、3日で卒業。潜在能力がパないらしい。

日常系もやった。バンドもやった。人気の陰りは窺えない。

「お前のイケメンリア充っぷりはすごいな」

「イケメンじゃないよ、冴えない普通の男子高校生だけどなぜか勝手に何でもデキて、モテるんだ」

俺は言った。

「何だか無性にケンカがしたくなった、てめー、この野郎殴るぞ」  
友達が不良になった。

「俺は戦いたくないんだけど、そっちから手を出すんじゃないだろうかないよねー」

俺は不良を一撃で成敗した。

「危ないところを守っていただきありがとうございます。結婚してください、妻になります」

か弱い女の子が言った。

「……君もか？」

俺はまた婚約者を増やした。

また歩くと、さらに別の子が話しかけてきた。

「私が部長を務める、ちょっとマイナーな文化部に入りませんか」

「面倒なのは勘弁だけど、美少女が言うならしかたないね」

俺はその文化部の幽霊部員になったが、なぜか俺を中心としたドタバタ騒動が起こり、いつも最後は俺の裁量で幕を下ろす。ツンデレだった部長もデレた。

「ネットゲでもやるか（´・`・´）」

ネットゲームの世界でも俺は天下をとる。敵はいない。ニコ生ではアイドルで、t w i t t e r のフォロワー数はガガとならぶ。暇つぶしに小説を書けば新人賞を総なめし、趣味でスポーツをやったが全国大会を全て優勝してしまうのでダメだ。

「俺は超頭が良いのだ。もちろん参謀をやらせる」

「なんだか大戦が始まっていたらしいのだが、俺の戦略が的中し、見事大勝した。

「……帰るか」

「お帰り、ヒカル」

両親が海外転勤をし、幼なじみを始めとし数々の女性キャラクターとも同棲生活を送っているのだが、全員が勝手に惚れてしまっただめだ。

妹も姉ちゃんもいるが生まれた時点で俺に惚れているので論外。

何もかも簡単すぎて、退屈だ。つまらない。

そんな月見里ヒカルは、小説家になろうの平均的キャラクターである。

1・最初に謝々とく、「いめんネ」(後書き)

最近のなろうの小説は月見里ばかりで退屈だなあ……。

## 2・月見里ヒカルと異世界

最近、やたら異世界の人気があるので俺も行ってみることにした。

「そうだ、異世界行こう」

俺は思い立った。

ちょうどそんな事を思っていたら、目の前に異世界の扉が現れた。異世界に着くと、露出の多い服を着た美少女の剣士と、露出の多い服を着た美少女の銃士と、露出の多い服を着た美少女の格闘娘と、黒っぱいローリータの魔法使いがいた。

「あなた……名前は？」

美少女が聞いた。

「月見里でも小鳥遊でも、バカが喜びそうな名前なら何でもいい」  
俺は名乗った。

「魔王を倒してください」

爺が脇から歩み寄り、言った。

「という事だ、今すぐ魔王を倒しに行く」

「えー。まだ、初期装備ですよ」

美少女が言った。

「構わん。俺は時間は無駄にしない主義だ」

「……そんなあ、ギルドとかやらないんですか？」

「金なら魔王から略奪すればいい」

「でもー、魔王の城まで遠いですよ？」

美少女が言った。

「そこにプリウスあったら。飛ばしてくれ。あと、魔王にもアポ取つとけ、着いたらすぐ決戦だ」

走ること20分、俺たちはラスボスと対決した。

「よく着たな」



魔王は言った。

「セリフは飛ばす、じゃあ斬るぞ？」

俺は厨二くさい名前のソードを魔王に向かって振り下ろすと、魔王を倒した。

「ぐおおお！ 嘘だ！ この私が負けるなど！」

魔王討伐などたやすい。なぜなら、俺は完璧だから。

「よくぞやった。勇者よ」

王が言った。

「やりましたね」

美少女が言った。

「勇者さま、好きです」

剣士が言った。

「勇者さま、結婚してください」

銃士が言った。

「付き合ってあげてもいいんだからねっ」

格闘娘が言った。

「勇者さま、好きです」

ちょうど車庫入れを終えた魔法使いが、運転席のドアを閉め、言った。

「勇者よ、私の娘を嫁にやろう」

王が言った。

「よし、俺はもう現実世界へ帰るぞ。王よ、扉の場所まで運転しろ！」

「かしこまりました」

王は魔法使いからキーを預かり、帰路を飛ばした。

「他の作品が10万文字かけてやることを、1000字以内で済ます俺……。自分の才能が怖い」

勇者は帰りの車内で呟いた。

### 3・月見里ヒカルのミステリー

俺が一室で食事していると、隣の部屋からきゃーという声が。どうやら殺人事件が発生したらしい。

「うるせえなあ。俺はまだメシ食ってんだよ。謎解きはメシの後にしろ」

俺は言った。食事を終えて、腰掛けイスでゆっくりしていると、刑事が来て事件の詳細を説明した。

「ガイシャは真田倫弘、18歳。金銭などが取られた形跡はなし。部屋も完全に施錠されていて、密室殺人です」

刑事は淡々と語る。

「怨恨だな」

「犯人はトンネルを掘って脱出したんですよ」

美少女お手伝いキャラがわざとありえない回答をして、俺を立てる。

「いや、現場は3階ですし、銀行強盗じゃないんですから……」

読者サービスでこういうおもしろくもないバカみてえなこともやらないといけないから、探偵の取り巻きも大変だ。

「容疑者を連れてきました。この3人です」

刑事は言った。2人の女性と1人の男性が部屋に入る。

「川崎です」

川崎が言った。

「山崎です」

山崎が言った。

「真鍋です」

真鍋が言った。

「……合い鍵のようなモノを誰かが持っていたとしたら」

急にお助けキャラがそれっぽいことを言うと、1人の顔つきが陰しくなる。

その日の晩、なぜか隣の部屋に住むお手伝いキャラのような人が、なぜか電気もつけずに、なぜか帰ってきてから一番にシャワーを浴びようと服を脱ぐ。

お手伝いキャラのような人がバスルームで鼻歌混じりにシャワーを浴びると、背後から怪しすぎる人影が。当然手には凶器。

「そこまでだ!」

そこで潜んでいたIQ200の俺がバツと電気をつける。バツと振り返る犯人。

「……さん?」

実は犯人は刑事だった。部下の女性警官がバスルームから全裸で歩み寄る。

「いつ、嫌だなあ。ボクはただ、小鳥遊くんが心配になつて」

一応刑事は反論する。

「うるせえ黙れ」

俺はそれを論破した。

「私がやりました。部屋の錠はICカードだったので、機材を使って磁気をショートさせて開閉しました。真田殺しの凶器はここに来る前に山の茂みに埋めました」

「そんな、どうして……刑事さんが」

美少女が言った。

「あいつが! あいつが俺の妹を!」

刑事は興奮気味に動機を語った。

「いかなる理由があろうとも殺人を犯しては刑事失格です」

ここで聖人君子たる俺(IQ200)が説教する。

「……いつから気付いていたんですか?」

「君が俺の部屋に来た時からだよ、あの時君は血まみれだったからね」

俺は刑事に引導を叩きつけた。

「じゃあ、先輩はその時からすでに……」

美少女がIQ200の俺の推理に驚く。

「それに来るの早すぎたしな」

「なんてこった……」

刑事はその場で崩れ落ちた。

「……さん」

女性警官とのラブロマンスが始まる。

で、エピソード。

「刑事さん、あんなに優しくていい人だったのに。何が人を変えてしまうか分かりませんね。先輩だって」

美少女お手伝いキャラが言った。

「俺は間違いを起こさない。なぜなら俺は完璧だからだ」

「そうですね。先輩はIQ200、全統模試オール1位ですからね」

「うむ。おまけにイケメンで運動神経も抜群だ」

「好きです、結婚してください」

美少女お手伝いキャラが言った。

#### 4・月見里ヒカルの10割バッター

どうやらドラッガーを読めば甲子園に行けるらしいので、俺もやってみることにした。

「ドラッガーも読んだし、野球やるか」

俺は野球部を訪ねた。

「お待ちしておりました、月見里先輩」

野球部員は言った。

「うむ。しまつていこうぜ」

「ポジションはいかがいたしましょうか？」

「俺は守備はせん。DHだ」

「高校野球にDHは無いのですが、月見里先輩がそうおっしゃるのなら」

そうして俺は指名打者となった。無論4番だ。

「月見里様、今日は全国高校野球選手権大会、予選日にございます」  
結局あの日を境に部活には一度も顔を出していない。なぜなら練習などする必要がないからだ。

「よし、今日が本番だ。優勝しようぜ」

「はい。月見里先輩のために全国から選りすぐりのピッチャーと内野手を集めました」

「あれ？ お前ショートじゃなかったの？」

「外野の任を貰いました。ポジションさえあれば、私は十分にございます」

野球部の前キャプテン、元ショートの堂島は言った。

「まっ、先発に県出身者が1人もいねえところもあるからな。ウチなんてかわいいもんよ」

そして俺はグラブも持たずに球場に赴いた。

俺はユニフォームに初めて袖を通すと、試合開始に立ち会った。

「初めまして、月見里くん。よろしく頼むよ」

監督は言った。俺は挨拶を済ますと、ベンチに座った。

「好きです、月見里くん。付き合ってください」

マネージャーが勝手に俺のことを好きになるが、気にせず試合に集中する。俺たちの攻撃はウラなので、DHの俺は暇だ。

「はい。月見里くん、頑張つてね」

また違うマネージャーが俺に麦茶を差し入れする。

「月見里先輩、相手チームのデータをご覧になりますか？」

後輩マネージャーが言った。

「いや、いい。俺にはデータなんざ必要ねえ」

そうだ。俺にはストレートであれ、フォークであれ、シュートであれ、ストライク（バットにボールが届く場所）にボールが来さえすればスタンドに運べるのである。

「頼もしいね、期待してるよ」

監督が言った。

テンポよくアウトを重ねると、1回ウラへ。1死1・2塁の場面で指名打者、俺。

「おかしい……何だか急にド真ん中にゆるいストレートを放り込みたくなってきた」

相手ピッチャーがそんな事をぼやいた。

ピッチャーが投げた初球をバットに当てると、打球はたちまちきれいな弧を描く。ホームランだ。

ホームに帰塁した俺を堂島がハイタッチで出迎えた。

「さすがにございます、月見里さま」

堂島が言った。

「うむ。お前たちもがんばるが良い」

俺は何だか急につまらなくなつて、寝ることにした。

「月見里さま、打順にございます」

俺は堂島に起こされた。2 順目だ。俺は眠気の残るまま打席に立った。

初球、大きく外してくる。

2 球目、ソロを叩き込む。俺は悠々と帰塁した。

3 順目、俺は敬遠されるようになった。特にやることもないので盗塁する。ホームスチールで1点取ってやった。

「月見里さま、ご大儀でございました」

堂島が言った。

その後、この試合はコールドで大勝した。

次の試合も、その次の試合もだいたい同じような感じだった。

そうになると『明德義塾対星稜』の松井のように全ての打席で敬遠されるようになった。直前の打者に対しても四球を与えるので、無闇に盗塁もできやしない。

たまに勝負に来るやつもいたものだが、すべてスタンドに運んでやったため、もはや俺に対してストライクを投げ込む投手は皆無となった。

そうになると、野球というより何か違うもののような気がしてきた。

「堂島、どうにかならんか」

俺は言った。

「さあ、私も敵チームに対してはどうにも……」

俺は野球部を勇退した。

サッカーもやったのだが、だいたい同じような感じだった。

## 5・月見里シェフの一見さんお断り

俺は自炊もする。なぜなら俺は完璧だからだ。

「うし。作るぜえ」

冷蔵庫にあったのは、マヨネーズと、卵と、ケチャップ。それにキムチ。

俺はそれらを駆使し、麻婆豆腐を作った。

「うむ。なかなかイケるな。俺は料理家としても大成するんじゃないか？」

という事で俺はフランスの5星ホテルの厨房に、弟子入りを志願した。

幸い、門前払いではなく、鍋ぐらいは触らせてくれた。こういう輩には、ダメだダメだ話にならない、などと難癖を付けて帰らせるらしい。

行きの飛行機でフランス語の勉強もしてきたので、通訳もいらない。

「じゃあ、いくぜ」

材料もまかないレベルのものしかなかったが、俺はとにかく文字で表すのもままならないようなスゴい料理を作った。

「すげえ。錬金術だ」

若いシェフが言った。

「そんな……嘘だろ」

ベテランシェフが言った。

「味も……いい」

シェフ長も言った。ぶっちゃけ何を作ったのか俺でも分からない。「この肉、どこから仕入れたんだ？」

ベテランが言った。まさかくすねたのか、と言わんばかりの表情だ。



「まさか……くすねやがったのか？」  
若手が言う。

「おいおい。よしてくれよ。俺は来てからずっとこの厨房のこの場所にいたんだぜ。最高級の肉が、勝手に適切な大きさに切られて、勝手に料理の中に入ったに決まってるだろ？」

俺は言った。俺の料理はオートマなのだ。

「それもそうだな」

若手が言った。

「疑って……すまなかったな」

ベテランが言った。

「ツキミーザートゥ、君は今日からこのクルーの一員だ」

シェフ長が言った。フランス人は漢字が読めないので『月見里』を『ツキミザト』と読んでしまう。困ったものだ。

「ヒカルでいいぜ」

その後、3日間の修行を得て俺は独立することにした。技術を全て学び取ったのだ。

「いらっしやいませ」

フランスの一流ホテルで修行を積んだ俺の料亭に、今日も客が来る。もちろん店は日本料理の店だ。

「月見里さん、あの方、美食倶楽部のお偉いさんですよ」  
声を潜めて若手が言う。

店を構えて一週間、数々のメディアの取材が来たが、全て断ってきた。こういう輩も追い返してきた。

ちなみにこの若手はあのホテルから輸入してきた人材である。  
「申し訳ございまへん。ウチは一見さんお断りどすえ」

フランス語なまりの若手が言う。

「いや、ぜひこちらの料理を食べたいのだ。紹介者もすぐ来る」

彼がそう言うので、俺は仕方なく上げることにした。紹介者もすぐ来た。確かにウチの客だ。

「どうするんですか。厨房の冷蔵庫に七味唐辛子しかありませんよ」  
若手が言った。

俺は若手に着物を着せて懷石を運ばせた。

「ほう。ライチか……」

お偉いさんは土瓶蒸しを味わっていた。

「なぜ、土瓶にライチなのだ？」

お偉いさんがそういう事を言ったので、若手は俺を呼んだ。

「料理長よ。なぜ土瓶にライチを入れた？ よもや皆がそうするか  
らだという短絡的なものではあるまいな？」

お偉いさんは言った。俺はライチが入った事さえ気が付かなかった  
のだが。（むしろ土瓶と言うからにはかばすかと）

「はい。勝手に入ったからでございます」

「なんと……！」

「私の料理はオートマ式ですので、入った材料が最適な材料だとい  
うことになります」

「はっはっは、こやつめっ」

なんとかお偉いさんを納得させる事ができた。

俺は厨房に戻って再び料理を作る。事は順調に運び、俺はシメの  
一品を若手に運ばせた。

「ムウ……ダシのとりかたは完璧、調味料の配合も申し分ない。酢  
を使っているが、酢のキツイ香りを巧みに抑えてある。ふむ……全  
体的にわざと香りを抑えてある……いや待て……かすかに……かす  
かに何か香りをつけてあるぞ！ このわずかな香りが、この何もな  
んの味も匂いもなきものに、鮮やかでふくよかな風味を与えている  
のだ……この香りはなんだ？」

急にお偉いさんは考え込んだ。

「おのれ……！ この雄山の味覚と嗅覚を試そうというのかっ……！」  
お偉いさんは、激怒した。

「かっ……海原さん」

紹介人が言った。

ドスドスという音を踏み鳴らして、お偉いさんが厨房に乗り込んで来た。

「この料理を作ったのは誰だ!!」

お偉いさんは怒鳴った。

「おっ、俺です」

俺は言った。

「きさまか！ この雄山を試すような真似をした小僧は！ 問題はこの香りだ、木の実だ…… 木の実をもちで酒に漬けておいて、木の実の色と香りのついたその酒をツユのなかに入れた!! そうだな!!」

「……おそらく」

俺は言った。

「問題は木の実だ、木苺でもない、すぐりでもない、さくらんぼでもない…… コケモモでもない…… 桑の実だ!! そうだろう!!」

「……雄山さんがそうおっしゃるのなら」

俺は何が何だか分からないがとりあえず頷いておいた。

「ふっふっふ……この雄山を試しておって、生意気な小僧だ」

そう言つと、その日はお偉いさんは満足そうに帰っていった。

それから、その爺さんはちよくちよく来るようになって、何だか俺は面倒くさくなったので店を畳んだ。

## 6・やまなし！

日常系をやってみたいと思う。とりあえずタイトルを4文字にするやいいんだろ？

「俺あ、いつけーゆりっつーのをやってみたかったのだ」  
俺がそう言くと、俺は美少女になった。

「けけけっ……完璧すぎる俺が怖いのう」

美少女はしたり顔で言った。

美少女は登校する。

「月見里、お前美少女になったのか？ やっぱお前スゲーよ」  
かつての友が言った。

美少女になるなど造作もない。なぜなら俺は完璧だから。

「おうよ。道を開ける、かしずけ。美少女のお通りだ」

美少女は朝の廊下を渡った。

「月見里くん、女の子になったの？」

教室に入ってから、女子が言った。

「まあな。イケメンのままだと勝手に惚れられて、最近じゃあ会話すらまともにできねえし」

俺は言った。

「きやー、女の子の月見里さまも凛々しゅうございます」

女子が言った。

「今日のテーマは日常系なのだ。お前らと友情を育むのだ」

「そうになると、3〜5人編成がいいわよねえ」

女子が言った。

「いやあ、何人でも構わない。けいおんとかAチャンネルとかゆるゆりみたいな、あーゆうオタクどもにウケそうなしょーもない日常が送れればそれでいい」

「女子がくつちゃべってりやそれでいいわけですね」  
女子が言った。

「おう。萌え萌えな感じて頼む。たまに脱げ」  
俺は言った。

「さて、晴れて女子高生になったことだし。一服、飲むか」

「えー、教室だと火災警報機が作動しちゃいますよー」  
女子が言った。

「しゃーねえ、屋上行くか」  
俺は言った。

「だめだよ、月見里ちゃん」  
委員長が言った。

「おー、委員ちよさん、よく聞いてくれ。俺たちや、天下の女子高生だ。だから何をやってもいい。タバコをふかしても、昼間っから酒を呑んでも、」 自粛 』を 』 自粛 』しても良い、なぜなら、俺たちは女子高生だからだ！」

品行方正な俺が委員長に教えを説くと、教室は拍手喝采。全ての者が俺の意見に賛同した。

「分かったわ。ごめんね、月見里ちゃん」  
「いいってことよ」

俺は屋上に行くことにした。

「月見里、お前はかわいそうだよ」

屋上。手すりに寄りかかって、メンソールをふかしていると。一人の教師が話しかけてきた。

「ああ？」

俺（美少女）は言った。

「何の努力もせず、全てのものを手にできるのは……かえってかわいそうだったんだ」

教師は若い男性で、熱血が好きそうな感じだった。

俺はすでにこの時点で今すぐにでも殴りかかりたいくらい力チン

ときていたのだが、会話を続けてやる。

「うらやましいなら羨望しろ。ねたましいなら嫉妬しろ。……同情だけはよせ」

俺は自分の境遇を同情されるのだけは、大嫌いであり、苦手であり、かつ、まっぴらごめんであった。

「あんた、いつだか言ってたよな。『俺も昔は相当出来が悪くて』って……やっぱり俺のこと、うらやましいんじゃないのか？」

お返しに、俺は一つ噛みついた。

「うぬぼれるな。俺は底抜けのドベだが、天才をうらやましいと思ったことなど一度もない。特に、ろくに努力もせん天才に対してはな」

「じゃあ何なんだよ!!」

俺は怒りにまかせて聞いた。

「ただ……かわいそうだと思っただよ」

そして、教師は最も俺の逆鱗に触れる言葉を口にした。

「なぜなら、お前が完璧すぎるからだ」

彼は、一番言っではいけないことを言った。

俺はついに我慢がなくなかった。激昂も通り越して、悪意もわいてきた。

「あつ……ああ、そうか。先生、ありがとよ。言いたいことは分かったぜ……感情的になって済まなかったな」

美少女は最も劣悪な笑みを浮かべて、この先生に取り入ろうとした。

彼女は、この教師を、痴漢に仕立て上げようと思った。

## 6 ・やまなし！（後書き）

作中、『 自粛 』を『 自粛 』しても良い、はか  
り過激な内容であるため、原文のまま投稿しようか悩んだが、掲載  
直前で訂正した。要するに日和った。

## 7・二神敬一の511/512

あたいは月見里ヒカル、16歳、JKだよ（´・・・´）  
今日は、むかつく教師を痴漢にしたてあげちゃうのだ（ゝ・）  
Vキャピ

美少女には、一人の男の社会的地位を失墜させる簡単な方法がある。それは、電車で身体を密着させて一声張り上げるだけという、他愛もないことだった。

これがあたいが思いつくあたり、一番簡単な方法だった。

「まもなく、2番線より……行、各駅停車、10両編成が参ります」  
アナウンスが伝える。

「せーんせっ！」

あたいは言った。

「なんだ、月見里か」

先生は言った。

こいつがむかつく先生なのだ。だから今日明日づけでこの先生には学校を辞めてもらうのだ。

「クルマ、使わないんですか？」

あたい（美少女JK）は言った。

「娘が習い事始めてから、嫁に取られたよ」

はっは、と笑いながら先生は言った。

笑顔とかまじキモい。死ね！ 氏ねじゃなくて死ね（＃

°）ぶんすかぁ

「今日は娘の誕生日なんだ」

そう言っ先生は、あたいにスマホの娘の写真を見せてくれた。

「きゃー、かわいいーいー（o（b おめでとーございますっ

」



あたいは笑顔で言った。娘の誕生日に痴漢をはたらく教師……悪くねえな。そりゃあこっちのニヤケも止まんねえつてもんよ。

「ははっ。お前も案外、かわいいトコあるじゃないか」

そう言つと、先生はあたいをなでなでしてくれたのだ。

「やーめーてーくださーいーっ」

あたいはぶりっ娘した。待つてろよ、お前の最後までもうすぐだからなっ。

もういつそこで申告してしまいたい衝動に駆られたが、車内じやないと人混みに紛れて逃げられてしまう可能性があるのでダメだ。そうこうしていると電車が来た。こちらはそれに乗り込んだ。

あたいは先生の隣についた。座席は座られているが車内はガラガラ。これでは不自然なので、あたいは乗客が多く乗り込んで来る3駅先まで待つことにした。先生は5駅目で降りるので、それからでも十分だった。

「せんせー、私がかかわいそうってどういうコトですか？」

あたいは言った。

「いや、お前、前言ってただろ？ 10分も勉強すりゃ司法試験受かるって」

「あははー、聞いてたんですかー？」

あたいはバツが悪そうに笑った。

「それで俺は、確信した。お前は正真正銘、天性のモノホンだつて」  
当然、この人は教師だから全統模試一位、定期テスト学年首位のバケモノの存在は認知しているはずだ。

「えー、照れーるうー。先生まじサックスみたいなあー」

「だがな……同時に、お前がかawaiiそうだと思っただ」

「だからさ、それが何でかって聞いてんだよ！！ あんたは現役ん時、勉強が得意じゃあなかった。何もしなくても首位にあぐらをかける俺が、うらやましいだろ？ 妬ましいだろ？ なあ、頼むから他の教師たちみてーによう、トゲのある冷たい口調で俺の名前を呼んでくれんかのう？」

あたいはぷりぷり膨れながら言った。

「お前……そんな扱いなのか？ それはそれで問題だな、お前に100点を取らせない会合なんてのも聞いたぞ。今度の職員会議で……」

「おい無理すんな、若造。それに俺は人の嫉妬ややつかみが大好きなんだ。余計なことあやめろよ」

あたいは先生に言った。

「で、結局あんたが言うところの私がかawaiiそんな理由ってのは？」  
あたいは話を戻した。

「俺がお前をあわれむ理由は、努力が報われる喜びを、お前は知らないからだ」

（#。 。 ）ハアツ?? みたいな。

「勉強が不得意どころじゃない、俺は、大の苦手なんて言葉じゃ生ぬるいくらいの出来損ないだった。俺はお前と同じ高校だったが、学年の最下位はいつも俺の指定席だった。今でも覚えてるぜ！ 512/512」

先生は話の方に熱を入れ始めた。

「ただな、ある日思い立って……思い切り勉強つてのをやってみた。毎日机にかじりついた……。テスト前日は徹夜もした」

「……で？」

「511/512。順位が、一つ上がった」

先生はとても満足そうに、誇らしげな顔で言った。

「最下位を取るために生まれてきたようなやつが、ドベを脱出したなんて分かったら、もうその日は凱旋帰宅さ！！ カーチャンは慌ててスキヤキの具材の買い出しに走り、連絡を受けた親父は同僚との付き合い放つぽってまで帰ってきた。兄弟はてんでこ舞いで、一家はお祭り騒ぎだ」

「あんた、よく教師になれたよ」

「俺もそう思う」

先生は言った。

「それから、俺はテストがちょっとした楽しみになった。わずかだが、やればできるという、当たり前前の感触を再認識できたからだ。それから俺の、ささやかな快進撃が始まった」

あたいは先生との距離を、ちよつとずつ詰めていった。

「そりゃあツライ時や、苛々した日々もあったさ。それでもテストや模試が終わるたび、馬鹿みたいにはしぎ回ったもんだ。もう、上がるしかないような位置だったからな」

ドアが開く。こちらが乗ってから、2駅目に着いた。

「今でも511/512の通信簿は神棚に飾ってるよ」

先生は言った。

「だが、お前はどうか？ 全統模試の通知返却の時、オール1位だったのに、当の本人はつまらなそうに丸めて、ゴミ箱にポイするそうじゃねえか。ありゃあ、全国の受験生が泣くぜ」

あたいはキレイ好きだから、かさばる書類はガツコで捨てるのだ

(・・・)

「勉強にしろ、何をやるうにしろ頭打ちすぎて、成長する楽しみを、努力が報われる喜びを知らないまま、お前は大人になっちまうんだ」  
ちゃんちゃら余計なお世話だった。

「しくしく、先生なりの慈悲を向けてくださって私は涙が止まりませんよ。えーん、えーん( ; ; )」

こちらが乗ってから3駅目。お堀口駅までの到着時刻は、着々と迫ってくる。電車が減速を始める。

まったく、手間かけさせやがって。

あんたの教師生命は、ここで終わる。

「だからさ……やっぱり……も……」

さよなら。俺は帰りの挨拶を心の中で済ませた。

電車がお堀口駅に到着。完全に停車した。先生はまだ熱弁をふるっている。

ドアが開いてから数秒、こちらは人の波に押され、車両中央へ。あたいは先生に身体を預けた。

先生、あなたはなかなかだったよ。ただ、説教をする相手を間違えたんだ。くだらん正義感などふりかざさずに、早い話が、俺みてえな浮きこぼれなんざ放っておきゃあ良かった。

ここまで率直なまでの実直は愚直以外の何もんでもねえぜ。そういうお節介を働かせるから、今こうして教え子の謀反にあい、何もかも失っちゃうんだぜ？

あんたの敗因はたった一つ。

あんたは俺を、怒らせた。

「だから……って、あれ？ もうお堀口か？」

先生が言った。どうやらふと我に返ったようだ。まあ、いいさ。もう決起の瞬間まで秒読みだ。けれども、何かがおかしい。

何だ？

この妙な感じの違和感は。

「……そうですけど」

あたいはすでに身体を密着させ、先生の手を握ろうとしていた。無警戒な先生の手をやにわに持ち上げて、「痴漢です！」と一声張ればそれでゲームセットだ。

しかし、まさにその時、先生は信じがたいことを言った。

「すまん、月見里……」

俺……

ここで降りるわ」

彼はそう言うのと、いそくさすいすいと人の流れを縫って、電車を降りようとする。

「えっ……どっ、どうして？ どうしてなのさっ？ あっ、あっ、あんたン家の最寄り駅は、2駅先の砂波じゃなかったのかよっ!？」

俺は言葉も選ばずに尋ねた。いや、理由を聞かずにはいられなかった。

去り際、先生がまだ閉まらぬドアの目前で、こちらに振り返った。ちようど、車両とホームの境界線を越えようかという所だった。

「駅前のストレイツで娘のケーキを予約してるんでな。じゃあな、月見里」

ストレイツといえばお堀口駅前のケーキの名店。ここら一帯で、一番ケーキが美味しい洋菓子店である。まさに我が子の誕生日ケーキを任せるには、うってつけの店だった。

「あつ、ああ……そうだったのか……またね……せんせつ」

俺はあろうことか、今日で終わらせるはずの人間に対して、『またね』と言ってしまった。

これが、俺の人生、初めての敗北だった。

## 8・月見里ヒカルの笑婦と淑女

師走の寒空のもと、人生初の敗北が、あたいの頭を一杯にしていた。

「この俺が……敗北？」

信じられない……。

衝撃の敗北から電車に揺られ、適当な駅で引き返し、お堀口駅まで戻った。

家へ帰るには、学校に近い駅へとんぼ返りするよりも、お堀口駅のターミナルからバスなりタクシーなり拾った方が早く帰れる。

「ありえない……」

バスを待つ間も、タクシーの列を眺めるのも憂鬱だった。

その時、ふっと、眠気に近いめまいが急激にあたいを襲った。

あたいはふらふらと車道に引き寄せられる。

遠のく意識の中、クラクションが鳴っているのが分かった。

けれども、もうそんなこと、どうだっていい。聞きたくもない。

見たくもない。何もかも。

疲れたから。

グシャッ！！

しだいに意識が戻ってきて、あたいの目の前には悲惨に潰されたケーキの箱があった。クリームもスポンジもないようにぐちゃりと、見るも無残に挽き潰されていた。

「あほお！！ 死にたいんけ！？」

クルマのドライバーが窓を開け、言った。

「すまん、兄ちゃん！ この娘お、ちょっと疲れてんだ。許した  
げて！！」

後ろから……声？

聞き覚えのある声だ。

あたたくくて、力強いくて、頼もしい、お兄ちゃんのような声。

その人が一言言つと、タイヤにクリームを引きずらせながら、ド  
ライバーは再び車を走らせた。

しばらくして、あたいは腕にも違和感を感じた。

誰かが私のことを支えているのが分かった。ふらふらと突発的に  
車道へ飛び出そうとしたバカ娘を、誰かが歩道側から引つ張つて、  
制止してくれたのだ。

ぬくもりのある、あたたかい身体。

あたいはおそろおそろ振り返る。

そこには、先生がいた。

歩道側からしっかりと、華奢なあたいの手を掴んでいる先生がい  
た。

「どうして……助けたんだよ」

たった今俺自分を助けた命の恩人に対して、第一声、あたいはひ  
ねくれたことを聞いた。

「ケーキは頼めばまた作ってもらえるが、命は一つだろうが！！」

キュン！！

あたいの中で何かが芽生える。

「……娘さんの大事な誕生日に、んーなしかたこと言っなよ」



先生は、あたいを歩道側に引き寄せて、2・3小言をぶつける。それからあたいはふさぎ込んで、そのままバスの停留所の列の脇にへばった。

「そだつ。せんせつ、あたいのパンツいるう？」

お詫びにあたいは言った。上目遣い攻撃である。

「うちはセキュリティが厳しいんだ。帰宅してまず、手荷物検査とケータイチェックだあ」

先生は一息置いて、続けた。

「同僚のハートマークで大目玉だぜ？ 教え子のパンツなんざ持つて帰った日にや命の保障はねーよ」

「おー、お宅の密輸捜査官……やりおるなっ」

ちよー余計なお節介だったらしい。

「しかし、参ったなこりゃ。実のところ……俺はもうお手上げだ」  
時刻は6時半を回っていた。あたいの命と引き換えに、先生は愛する我が娘へのバースデイ・ケーキを失ったのである。察しきれないほどの無力感と、途方もないような虚無感を抱いているに違いない。

「今から頼まれてくれるケーキ屋……探すか……さすがにストレイツには頼みづらいし」

先生は落胆混じりに言った。

「この界限でそんな所……あるかどうかすら……」  
先生は悩んでいる。

「いや、もつと良い方法がある」

俺はこんな時に一番冴えた方法を提案した。

「俺に、任せてくれないか？」

「……は？」

あ然とする先生。そのハトが豆鉄砲食らったような顔に、もう一回、俺流のクールな提言をぶち込む。

「娘さんのケーキを俺に作らせてくれと言ったんだ。そのアスファルトの上で潰れてるのよりも、何倍も良いのを作ってみせるぜ」

俺はアスファルトの上でくたばっている、この境界で一番うまいケーキを指差して言った。

「そんなこと……お前にできるのか？」

「できるさ。なぜなら俺は……」

先生の前で、この文句を言うのを一瞬ためらったが……やはりこの言葉じゃないとしまりがないので……俺は自信满满、いけしゃあしゃあと言った。

「なぜなら俺は、完璧だからだ!!」

「……心配だなあ」

先生は明らかに信用してない口調で言った。

「まかせろ。こう見えても俺はフランスの 5 ホテルで修行したこともあんだぜ？」

「……それ、パティシエとしてなんだろうな？」

俺は聞こえないフリをして、キッチンを貸してくれるところを探した。

すると、ビルの窓ガラスから明かりが灯っている教室が見えた。製菓学校だ。駅前という何とも恵まれた立地。これを利用しない手はない。

「せんせーは先に帰ってて」

「おっ、おい!!……」

「大丈夫。とびきり豪華な誕生日ケーキを、後でお届けするから」

俺はタクシーを拾うと、車内に押し込むようにして先生に帰宅を促した。

俺はその後、駅のパソコンとプリンタで学生証を偽造し、製菓学校に乗り込んだ。

「すごい！！ 天才だ！」

製菓学校の教員が、オレのケーキをべた褒めする。

「くっ……こんなのが作れるなんて」

学生はズブの素人の俺に嫉妬する。

「ケーキを運ぶから、保冷剤と箱をもらっぜ」

俺は箱をかつぱらうと、先生の愛娘の誕生日にふさわしいラッピングをする。

「プレゼントですか？」

「あー、せめて、写真だけでも撮ろうよー？」

女子生徒が俺に言った。

「ごめんね。ちよっちいお急ぎなんだ」

俺はそう言い残すと、製菓学校を出た。免許皆伝。事実上の卒業だった。

「つつてもよう。そのまま押し掛けて、ちわーす、ケーキのお届けにあがりましたー、つても芸がねえよな？」

俺はふと考える。粹なはからいの一つでもできないものかと悩んだ。

「ここはちよつと俺様の裁量で……」

そう言つて、俺はケータイの電話帳を片っ端から漁った。

ピンポン！

俺は呼び鈴を鳴らした。

「すみませーん、 配送です。二神奈々さんいらっしやいますか？」

俺（美少女、宅配着姿）は言った。

「はっ……はいっ」

まだ8・9の女の子の、幼い声がインターホンから聞こえた。

「何かなあ？ 奈々ちゃん、出てごらん？」

遠くで、若い奥さんの声が聞こえた。

ガチャリ！

今日の主役が、ドアを開ける。

「せーのっ！！」

俺は音頭をとった。

「お誕生日おめでとう！！ 奈々ちゃん！！」

先生の家の玄関前に、集まった40人の高校生が一斉にクラツカ  
ーを鳴らし、声をそろえて奈々ちゃんを祝った。

2 - 5。男女総勢40人。二神敬一のクラスの生徒たちである。

最初はびっくりしたようだが、しばらくして、ようやく奈々ちゃん  
は恍惚に近い表情を浮かべた。

「たくよー。交通費も小道具代も自費だぜえ」

「こらっ！ せっかくのお祝いムードが冷めちゃうでしょ。そんな  
こと言わない！」

「そうだよー。二神先生にはお世話になってるから全然だいじよぶ  
だよー」

「何だかんだ言って斎藤、お前が一番世話になってるだろうが！」  
「まっ……それもそだな」

姦しい軍団が一斉に騒ぎ出す。

サプライズに心躍ったのか、奈々ちゃんがこちらに向かって走り出してきた。

「奈々ちゃん、お誕生日おめでとう……いくつになるの？」

世話好きの女子がそれを抱きしめるように受けとめ、頭を撫でた。

「はいっ……10ですっ」

奈々ちゃんはちよつと緊張しながらも、凜として答えた。

「……はいっ、これ。お誕生日プレゼント」

そう言つて彼女は、奈々ちゃんにプレゼントを差し出した。

「コレも！」

また、一人の女子が差し出した。

「奈々ちゃん、このお人形、かわいーでしょ？」

「奈々ちゃん、このポーチも」

ところどころから声があがり、あれよこれよとプレゼントの嵐。

奈々ちゃんは40の好意に埋もれた。

「まったく、たいした奴だよ。月見里つてのは」

「だよーねー。沙紀の塾の課題も、私たちの宿題も、珠洲屋くんの部活のトンぼかけも、全部肩代わりしちゃうんだから」

「普段からお世話になってる二神先生だし、来ない理由がないよねー」

「まっ、先生のためだったら、私たちも無理を押してでも来るんだけど」

「さすがに、あいつの執念はすごかったなあ……普段の傍若無人と手抜き加減が嘘みたいだ」

一同は姦しく騒いだ。

「奈々ちゃん、お誕生日、おめでとう」

そう言つて、あたいは奈々ちゃんにケーキを渡した。

「ありがとう、お姉ちゃん」

「ここに集まった人たちはねえ、お父さんのクラスの教え子たちだ

よ？」

「じゃあ、お姉ちゃんもパパのクラスの生徒なの？」

「違うよ？」

奈々ちゃんは目を丸くして、あたいを見上げた。

「じゃあ、お姉ちゃんは何？」

奈々ちゃんがそう言っていると、彼女の背後のドアが開く。なんだなんだ、とばかりに先生が家から出てきた。

「お姉ちゃんは何っ、パパに大切なことを教えてもらったんだ」

これが、あたいの人生初の敗北に対する“お返し”だった。

9・二神敬一と『お嬢ちゃん、万引きしたんだからさあ誠意を見せてよ誠意を』

スーパーとかの店長をやれば、万引きした女子高生とイイことできらしいので任されてみた。そういうシチュエーションをDVDで見たのだ。

「すいません……」

少女は言った。

「すいませんって……」

名張夕立ドラッグストア終身名誉一日店長こと俺は言った。

「キミねえ……困るなあ万引きってのは」

俺は続ける。

「しかも、カゴ抜けじゃないか」

少女は顔を突っ伏したまま。

「……すいません」

「これは初犯じゃあないね」

俺は続ける。

「これは通報だよ。通報」

そう言つと、少女は白い固定電話の受話器を取る俺の手を掴みながら。

「……お願いします。もうしませんから」

と泣きながら言った。

「いや、でもねえ。分かるかい？」

俺はニヤリと笑って少女との距離を詰める。

「……ひっ！」

「従業員の給料だってね、君がレジカゴにぶち込んでちよろまかそうとした、つけまとかの本来の売り上げで支払われるんだ」

「ごめん、なさい……」

泣きながら少女は言った。

「お嬢ちゃんね、棚からこっそりじゃない。豪快に力こっそり」と、僕たちのお給料を持っていこうとしたんだよ」

俺は言った。

「これは許されることじゃあ……ないよね？」

しばらく少女は黙った。

「さっ、もういいかい？」

俺は諭すように言う。

「おねがいつ……します」

ポツリと、少女は言った。

「えっ？」

「お願いします！ 何でもしますから！ 通報だけは！」

「ほう……何でも？ 言っただな小娘」

俺はほほうと啖呵をきった。

「本当に、何でもするんだな？」

「……はい」

俺はねつとりと万引き少女を視姦する。

「ダメだぜえ、年頃の娘さんがそんな軽口たたいたちゃあ……」  
ひらと、少女のスカートが揺れるのを見た。

##ここから先は単位と引き換えになります##

続きを読むためには、このノートの判定をAとしてください。

「こっ……こいつ!？」

二神敬一はペンを止める。

「誰のだよ、このノートは!！」

彼は言った。

「こっちは徹夜で課題見てやってるんだから、誠意を見せろよ誠意



をおおお！！」

敬一はその妄想ノートにでかかと、太い水性の赤ペンで『ペケ』を付けた。

## 10・月見里ヒカルの男性恐怖症（前書き）

今回のお話は、男性恐怖症の方は閲覧をご遠慮いただいた方がよい（／かもしれません）です。といっても、たいした話ではないのですが。

## 10・月見里ヒカルの男性恐怖症

最近、男性恐怖症のキャラが人気らしいので俺（美少女）もやってみることにした。

「俺、今日から男性恐怖症だから。お前は死ね！ 死ね！ クズッ！ 男はキモいから死ね！」

登校して開口一番、俺（美少女）は友達に言った。

「……そんなぁ」

「処刑だ処刑。男子は全員去勢なっ」

俺（美少女）は言った。

「強引だなー、やり方が」

友達は言った。

「ひっ……ヒカルは、男の人が怖いんですう」

怯えながら、俺は言った。

「まさかヒカルにもがれる日が来るとは……」

友は、絶望した。

「どっ、どうしたのヒカルちゃん」

女子が言った。俺は制服をめちやくちやに乱して、教室に顔を出した。

「乱暴……されたの？」

委員長（女子）が顔つきを陰しくして言った。その問いかけに、俺はしばらく間をとって、うん、と一っだけ頷いた。

「あのね……男子がね……何もしないからって」

泣きながら俺（美少女）は言った。発言の後、3・4人くらいの女子がこちらによってきて、抱きついた。頭を撫でてくれたりした。「ひどいっ……！」

一人は言った。

「誰にやられたの!？」

「……君と、……君と……君とか」

その言葉を皮切りに、女子による男子討伐軍が結成された。

女子は武装している。護身用のスタンガンとか護身用のタガーナイフとか護身用のレボルバーとか色々な兵器を各自持ち合わせ、男子を襲撃。これにより1組男子は陥落した。

「まだまだ数が足りねえなあ。3組にも行ってみるか」

ちょうどその時、後ろで銃発の乾いた音がした。女子軍が2組男子に奇襲をかけたらしい。

まさにフレンドリー・ファイアーである。

「……オチは？」

女子は半殺しにした男子に聞く。

「知らねえ……よ……」

遠のく意識の中、頭から大量の鮮血を流して、男子は言った。

## 11・月見里ヒカルの余命宣告

風邪とかひいたので病院に来ていた。いえつくしい！ ばかやろー！

「月見里さん、これから私が言うことを、落ち着いて聞いてくださ  
いね？」

東大病院の医師は言った。

「んー？ 何です？」

俺は言った。

「実は……月見里さんの余生は……」

先生は穏やかじゃないことを言う。

「へっ？ 先生！？ 今、何て？ 余生！？」

俺は焦った。風邪だと俺って来診して余命宣告とか、心の準備が  
まだできてない。

「月見里さんは、余命……」

言いづらそうに、先生は言った。

「……お願いします」

覚悟を決めて、俺はそれを促す。

「余命、72年です！！」

ドヤッ！！

東大病院の医師は言った。

俺は診療報酬を払わないことを決意した。

「しかし、とうとう俺も余命宣告か。美男薄命やな」  
帰り道、俺は言った。

「余命ねえ。俺もやりたいことをやってみるか」

翌朝。俺は登校する。

「おはよっ、ヒカル」

友が言った。アイマスっぽい。

「おはよう。突然だが俺はもう長くないのだ」

「えっ……そうなの？」

友は驚く。

「そうだぞ。俺が死んだ時は、お前、しいてはこの学校の全生徒全教員は泣かねばならない」

「將軍様かお前は」

「となると、後継者選びだな」

「お前のような悪夢はもう2度と現れて欲しくないというのが、俺の本懐」

あれを取られてから、友達と言うようになった。

「うるせえ！ お前、俺のおかげでスカート履けるようになっただろ？」

俺が気まぐれで友達を去勢して以来、めでたく彼（彼女？）はスカートデビュを果たしたのだ。

「お前は自在型『らんま』だから分らないと思うが、  
1本の代償つてのはかなりデカいわけ！！」

「いいじゃねえか！ 女の子は最初から付いてないんだぜ？」

「もっ……やだっ。こんなの、やだよう」

友達はその場で泣き崩れた。

めんどくさいので、そのまま放っておくことにした。

「こーけーしゃー、こーけーしゃー。俺の後を継ぐやつはいねえかあ？」

俺は後継者を探して、朝の学校をさまよった。

「おはよう。ヒカルくん」

委員長が言った。

「だめだ。尊大さが足りない」

「ん？ なぁに？」

「俺の後継者選び」

俺は言った。

「後継者？ ヒカルくん死ぬの？」

「昨日東大病院で余命宣告されたのだ」

「まあ、たいへんっ！？」

委員長は言った。

「本当に大変だったのだ」

ヒカルは言った。

「それでそれで？ どうだった？」

「余命72年やて」

俺は言った。

「年金貰えるやないかい」

委員長はツツこんだ。

俺はこういうのをやりたかったのだ。友人の去勢話とかどーでもいいんじゃないけえ。うまく落としてくれて、

ありがとう、委員長。

## 11・月見里ヒカルの余命宣告（後書き）

私は小説を書く時はいつも『主人公』私』の構図で書いているのだが、“どう考えても主人公”私じゃないだろう”が月見里ヒカル。



12・月見里ヒカルと死神（前書き）

2話連チャンモノです。

## 12・月見里ヒカルと死神

「おはよー、月見里ヒカル」

幼なじみ系の死神は言った。

「ほーらあー、早く起きないと遅刻しちゃうぞ」

「んー、お前……誰ぞ？」

眠い目をこすって俺は呟く。

「おら、しにがみ」

「あー、そーなの。俺は眠いから寝るは（　　・　　・　　）学校  
はサボる。死神、もっとちこつ寄れ」

俺は死神（美少女）を添い寝させた。

「ねえー、起きてよー。おつきして危険がいっぱいの街に繰り出そうよー」

死神はただをこねた。

「しゃーねえなあ。分かったから、喚くな。耳にこたえる」

俺はしぶしぶ妥協した。

「けど、まだ死神と寝たい」

しかし、まだ寢床の温もりを捨てるのは惜しい。

「もー、しょーがないなー」

ピンポン！！

「ヒカル、お客さんだよ。早く出て、早く早くっ」

死神（美少女）が急かした。

「ちわーす。配送です。月見里ヒカル様宛の荷物でーす」

インターホンを覗くと、宅配員が映っている。

「カエレッ！！」

俺は言った。

「良いの！？ 大切な荷物かもしれないよ！？」

「『配送』は俺が二神先生にサプライズをするために作った架空の配達業者だ」

俺は言った。

「どうせロクなもんが包まれてないんだろ……爆弾とか」

「ぶつぶーう、違いますうー」

死神（美少女）は頬を膨らませて、かわいく言った。

「私がそんなことする訳ありません！！ お尻のポケットに隠した、コンパクトナイフで喉を一刺しでーっす！！ ぜーんぜんはズれえー！！」

死神のテクニクを舐めるな、とばかりに彼女は勝ち誇った顔をしている。

「なるほど……追いついて正解だった」

俺は2度寝をかますことに決めた。

「おーきーてーよーっ！」

死神（美少女）がうるさいので、しゃーなく起きることにした。

時刻は7時20分。結局、眠りきれず、登校することにした。

「……はよー」

俺は言った。

「学校に登校しないとダメだよ！？」

「わーった、わーった」

俺は一通り朝の準備を済ませて、学校へ登校することにした。

「一緒に登校だねっ、ヒカル」

「その幼なじみキャラ何？」

「いやー、いまわの際くらい、キミ好みにしてあげよーって」

カバン片手に、ウチの高校の制服を着て、宙に浮きながら死神（美少女）は登校。

ね？

とばかりに俺の隣からかわいらしい顔を覗かせ、浮遊して進む。

「なあ、あの8階のガーデンング、おかしくない？」

俺は微笑む。

「どこが？」

死神は微笑み返す。

「あの奥さん、今朝から急にガーデンング始めたのか？」

「そうだよ？」

「植木鉢……ぐらついてるよ？」

「えー、気のせいじゃない？」

死神はとびきりの笑顔を作って言った。

「大丈夫。私を信じて。私がヒカルにそんなヒドいことするワケないじゃん？」

「……さつき『いまわの際』つつたくせに、調子良いヤツ」

俺は言った。

「いや、ちよつと待て……違う。これじゃない。これはどーでもいいんだ」

俺は気持ちを整理する。

目の前に工事現場がある。これでもない。こういう必然的に注意が向くものは、ダミーの可能性が強い。

「もっ……もー！！　むつかしいコト、考えないでよー！！」

死神はごまかすような笑みを作って、言った。

「行こっ！！　ヒカルっ！！」

死神（美少女）は宙から手を差し出した。

それはまるで、天女のような美しさをもつて。

「考えろ……考えろ！　ヒカル！」

俺は自分自身に言い聞かす。

「お前ならどうする……どこにトラップをかける？」

死神（幼なじみ風美少女）はやや強引に手を取り、先を急かす。手を引いて、そのビル真下に誘導した。

「……考える」

死神に手を引かれながら、俺は頭をスパコンのように働かせる。

「……大局を見据えろ」

思考の絞りかすまで、俺は考えを巡らす。

「植木鉢は目眩まし、工事現場はダミー……だが、それを使って……」

あともう一息のところまで、考えが及びそうだ。

植木鉢が落ちる。当然それは避ける。

「……車道？」

俺は呟いた。

直後、コントロールを失ったトラックが俺に向かって突っこむ。

「おやすみ！ ヒカル！」

死神（美少女）は、満面の笑みで手を振った。

大型トラックが、マンションに衝突した。

マンションの1階が衝突で大きくソナー型に歪み、潰れた。

「感謝してよねー、最後の朝はゆっくり眠れたでしょ？……まっ、これからも眠るんだけどね」

「いや……今朝の睡眠はもう充分だぜ。安心しろ、今日はまだまだ寝かせん」

俺は泥だらけになりながらも、肥溜めに近い土砂溜まりから這いつくばって姿を現す。

「むう……困った人っ」

死神（美少女）は吐き捨てた。

「世話のかかる男はお嫌いで？」

「だーいすきっ！！」

死神（美少女）は言った。

「たっぷり痛ぶってあ・げ・る」

「おはよー、ヒカル」

スカートを履いた友が言った。

「この人、スカート履いてる……男の娘？」

死神が現世の仕組みに驚く。

「いや、俺が去勢した」

声を潜めて、死神に教えてやる。

「聞いてくれよー。昨日、新しいエアガン買ったんだー」

「……ふーん」

「俺チームとお前チームに分かれてー、サバゲーやろうぜサバゲー」

「その銃。最後の一発だけ実弾が入ってるから……注意しろよ」

「こりゃまた死神も呆れるくらんジョークを……急にどしたの？」

友はキョトンとした。

「お前が『俺を』誘ったからだ」

俺は言った。

「エアガンに実弾って、んなわけないだろー」

友は、大いに笑った。俺も大いに笑った。死神だけが、笑ってない。

「やはり、体育が終わった後は喉が渴くな……」

俺は言った。

「あの死神……さっきから急に姿を消したな」  
明らかに怪しい。

「まあ、いい。水だ、水」

俺が体育館脇の水道口に向かうと、例の死神（美少女）が縁に座って待っていた。

「……やっぱ良い!!」

「待って！　ねえ、待っててば！　喉、渴いたでしょ!？」

死神は引き返そうとする俺の腕を掴んで離さない。

「お前、絶対水道水に何か細工しただろ!!」

「してないよー!!」

死神は慌てて首を振る。

「いや、俺はスポーツドリンクを飲むことにした」

俺は財布から130円を取り出し、体育館脇に設置されている自動販売機に投入した。市場価格は150円だが、学割が何かで安くなっている。

「ねえー、ひどいよー。何もしてないのにいー」

死神は訴えた。

「そういう風に人を疑うの、よくないよー」

俺はペットボトルのキャップに手をかけると、死神はまたぶーぶー膨れた。

「ヒカル、絶対、性格悪いよおー」

死神はまた言った。

俺はフタを開封し、飲み込まずに、口に少しだけ含んだ。

すると、急に死神は黙った。あれだけ俺がスポーツドリンクを飲むことを抗議していたのにだ。

この作戦は諦めた……のか？

何か引つかかる。

俺は一度、それを洗面台に出した。

「きーたなーいーっ!!」

死神は再び騒ぎ出した。

どうも、腑に落ちない。

俺は同じものを、もう一度買って死神（美少女幼なじみ）に差し

出した。

「はい、幼なじみ。俺の奢りだ」

「……気を使わなくていいよ？」

「まあ、そう遠慮するなよ」

なぜだかそのスポーツドリンクを押しつけ合う結果に。

俺は一つ、あることを確認したくなった。

「おい、死神。ラジオつけてみる」

災害時対策用として、体育館にはポータブルラジオが何機か常備されていた。

「いいの？ 喉、カラカラじゃないの？」

「じゃあ分かった。それ、取るだけで良い」

しぶしぶ死神が渡した小型ラジオのスイッチを入れ、チューンをひねり、放送を聞いた。

「臨時ニュースです。 x 県の 製薬の清涼飲料水製造工場で毒物が混入した模様です。 県警は 製薬 工場で製造された商品を飲用しないよう呼びか」

死神はラジオを強引に消した。

「どこかの製薬会社も、まったく大変だよねー、さっ飲んじやって飲んじやって」

死神はあからさまな感じにグイグイとスポーツドリンクを勧める。

「全校放送！ 全校放送！ ただいま市の保健所から連絡が入った。生徒諸君、特に10時以降に搬入された体育館裏のラヴ・スポーツという清涼飲料水は購入しないように！！ 繰り返す……」

校内放送が体育館にこだまする。俺はペットボトルを見つめた。

ラヴ・スポーツ……ラベルにはそう書いてあった。

「だよ。いるか、コレ？」

俺はラヴ・スポーツを死神に差し出す。



「毒入りのスポドリってすごく不味いんだよねー、試しに一回飲んでみたんだけど、二度と飲みたくない味だったよー」

しれっと、突き放すように死神は言った。

「王子様、ために毒でも飲んでみない？ キスで起こしてあげよ　キスで」

死神（美少女）はけらけら笑った。絶対、学芸会とかで白雪姫役に向かないタイプだ。セリフに真実味がない。

13・月見里ヒカルと死神につ！（前書き）

2話連チャンもの後半です。

### 13・月見里ヒカルと死神につ！

「ねー、私、ヒカルのことー、気にいつちゃった」

死神（美少女）は言った。

「こっち来ない？」

べったりと身体を俺にくっつけ、頬をツンツンとつつきながら死神は言った。

「いや……遠慮しておく」

「あんまり私もさー、一人の人に時間かけてらんないんだよねー」

死神（幼なじみ系）は茶をすすりながら言った。俺ん家で。

「自殺してくんない？」

「押し入り、鈍器落下、トラック、拳銃暴発、服毒回避して最後自殺かよ」

「いーじゃん自分で死ぬるってー」

死神はみかんをもぐもぐ貪る。

「こっちに來た暁にはあー、お友達から始めてあげてもー……よくつてよ」

「そうやってお前、今まで何人お友達を引きずり込んだ？」

出涸らしのような茶をすすりながら、俺は言った。

「まったくヒカルはあ……」

死神は言った。

「生きてること自体にちよつとでも迷いのある男はあ……今のでたいていコロツと逝っちゃうんだけどねー」

死神はぼやく。

「でもね、好きになつたのは……本当っ」

「お願いします、許してください。お前にはもつと相応しい男がいるんで、俺のことはあきらめて。俺以外の他の男なら、いくら殺してもいいです」

俺は、土下座とかして誠心誠意頼み込んだ。

「止めてよぉー、わかったぁ付き合っー、付き合っつてばぁ。だから土下座とか止めてよー」

「話聞いてた!？」

俺は言った。

「好き！好き！だーいすきっ！」

べったりと少女はくっつく。

「大好きだよっ！ヒカル！」

死神に好かれてしまった……。

「そだつ。私の手料理食べてよ手料理」

「えー……手料理いー」

げんなりとした表情で俺は言った。

「ばっ!! 私が毒とか入れるわけないでしょ!? オトコはまず胃袋から掴むのよー」

「胃袋掴むより、魂そのまま持つてった方が手っ取り早いような……」

……

俺は言った。

「おやー、男子高校生？女の子の手料理はポイント高いんじゃないかなくって？」

「萌え萌えよのう……」

俺は言った。

「なんだと……」

目の前には、ステーキ、香箱ガニ、アワビ、ウニ……など、浦島太郎の竜宮城でもてなしを思わせるような食材たちがズラリ。

「恐れ入った？」

得意気に死神（美少女）は言った。

「っーより、どうも食材の力が強いような……」

「何か言った？」

死神は、片すぞとばかりに皿を一つ持ち上げた。

「いやあ、ごめんごめん。お見せしました」

「でしょー？」

死神（美少女）は誇らし気に言った。

「こんな贅沢……良いもんかねえ？」

食卓に並べられた高級食材たちに、俺は思わず顔をほころばす。  
「食べて、食べて。がつつくオトコが好き。私の手料理の虜にな  
なさいっ」

「と、その前に毒味だ」

「もー、またそれー？」

死神は呆れた。

「そんな時にはどんな道具を使うの？」

「毒物チェッカーノツー!!」

俺は言った。

「毒物量・0025。暫定基準値を下回ってるな」

俺は言った。

「スポドリの時になぜ使わなかった!？」

「据え置きなんだよ」

「さあ……直ちに健康に影響がないことが分かったところで……召  
し上げれ」

死神（美少女、俺にメロメロ）は言った。

「あーん、してあげようか？」

死神（萌え美少女）は箸でぷりぷりアワビをはさんで、こちらに  
向けた。

「おー……分かってるねえ」

「ふふん。舐めてもらっちゃあ困るな」

死神（幼なじみ美少女）は箸でアワビを一切れはさんで、こちら  
の顔に向けた。

はいっ……あーん

俺は箸をもちぶりつく勢いで、高級食材にありつく。

「、（。　）人（。　）人（。　）ノ　　！！！！！！」  
俺は言った。

「喜んでもらえたようで、なにより」

幼なじみは満面の笑みを浮かべ、こちらに笑いかけた。

「おまさい！　おまさい！」

たまらず俺は拍手しながら言った。

「あらー『お前最高だよ！　絶対将来良妻になれるよー！』だなんて照れるわあー」

美少女幼なじみは言った。

「じゃあ、ちょっと私、出てくるねっ」

そう言って、美少女幼なじみは席を立った。

「むう……おいつしいのう」

頬張ったアワビの食感に舌鼓を打つ。

「ようし、次は佐賀牛、貴様だ！！」

俺は、賊が襲撃した村で略奪をなすかのごとくゲスな笑いを浮かべ、標的を絞る。

標的……ロックオン！

発射！

……スカッ！

外した。

標的、再びロックオン！

発射！

……スカッ！

また外した。

「なんで、なんで佐賀牛ステーキがつかめへんのや!？」

そこには、衝撃の事実がっ!!

「……箸がないからや（．．．）」

あの美少女幼なじみ、出る時に箸を持って行ってしまったのだ。

「まったく、ドジっ娘だなあ」

幼なじみが持つて行って箸は、家にあつた唯一の箸だ。

俺は渋々、これから箸探しの旅に出ることにした。

「すまんなあ、ご馳走たち。決して冷めない熱い気持ち……忘れるなよ」

食卓に並べられたご馳走たちに、しばしの別れを告げた。

箸探しの旅1：スーパーで断られる

旅2：コンビニで断られる

旅2.5：弁当を買うという強行策に出るも弁当売り切れ

旅3：100均で割り箸売り切れ

旅4：雑貨屋で業務用品切れ

「ダメだ。世間は空前の箸ブームらしい」

どうしても箸が手に入らない。

そんな時、一人の救世主が。

「あら、ヒカル君……どうしたの?」

委員長が言った。

「委員長、箸、持ってない？」

涙目で俺は言った。

「持ってるよ。はいっ！」

俺は委員長から箸を賜った。

「ありがとう、委員長」

マンションクリアー！

ご馳走が待つ家に俺は帰ることにしたぬるぽ。

が。

帰ってみると、消防車数台、救急車3台、それにパトカー、野次馬の人だかりがマンションを囲っている。

どうしたんだ。

何が起こった？

夜だというのに妙な明るさ。

見上げると、マンションが燃えていた。

「いやあああ！ 俺ん家があああ！」

燃えていた。

豪快に、悲惨に、火柱と灰煙が立ち上り、黒い燃えカスが宙に散っていた。

しばらくして、消防の人が駆け寄ってきた。

「あなた、このマンションの住人ですか？」

彼は尋ねる。

「そうです」



「お部屋は!？」

彼は俺の肩を手で制し、問いつめるように聞いた。

「406です」

「他に、あなたの部屋に同居人、来客者などは!？」

ここに来てようやく事の次第を理解し、落ち着いて答えた。

「いえ、私一人です」

その言葉に対し、彼はしつかりと頷いた。

「406、搜索中止!! 406、搜索中止!! 要救助者なし!」

彼は無線に向かってそう伝えると、せわしなく駆けて行った。

後日知った話だが、出火元は3階。死傷者相当数を出す大火災だったらしい。

「あなた、本当に運が良いですよ。406号室はガレキでドアが開かず、救助隊も手がつけられなかったんです」

そんなことも言われた。

おそらく、火災に気がついた時にはドアが開かず……苦しみのうち焼死(ないし一酸化炭素中毒)、という算段だったのだろう。

先日、街でかつての死神(幼なじみ系美少女)を見た。

どうやら別の人間に照準を切りかえたらしい。

ちょっとした安堵とともに、俺にはある一つの箴言が芽生えた。

「次はどうか……現場に箸を遺すのをお忘れなく」

冬空のもと、彼女はこちらに向かって微笑んだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4591z/>

---

小説家になろうの平均的能力値の月見里ヒカルがツンデレの妹と、気まぐれで

2012年1月13日19時57分発行